

アウト・オブ・ コントロール

世界は混乱へ向かう!

OUT OF CONTROL

Zbigniew Brzezinski

アウト・オブ・コントロール
世界はもはや「制御不能」だ!

人類が直面するかつてない危機に
警告を発する論争の書。

草思社 定価1800円(本体1748円)

アウト・オブ・コントロール

世界は混乱へ向かう!

ズビグニュー・ブレジンスキー

鈴木主税 一 訳

草思社

OUT OF CONTROL : Global Turmoil on the Eve of the Twenty-First Century

by

Zbigniew Brzezinski

Copyright © 1993 by Zbigniew Brzezinski

Published by arrangement with Charles Scribner's Sons, an Imprint of Macmillan

Publishing Company, A Division of Macmillan, Inc. (USA)

through Japan UNI Agency, Inc., Tokyo

アウト・オブ・コントロール

● 目次 ●

はじめに 5

第一部 組織化された狂気の政治 13

第一章 大量死^{メガデス}の世紀 17

第二章 全体主義のメタ神話 30

第三章 強制的なユートピア 44

第二部 政治意識の目覚めを超えて 59

第一章 ささやかな信念の勝利 69

第二章 豊かさをもたらす精神の空洞化 77

第三章 哲学の分極化 89

第三部 比類なきグローバル・パワー 99

第一章 グローバル・パワーのパラドックス 103

第二章 色あせた自由のメッセージ 115

第三章 顔の見えないライバル 130

第四部 グローバルな無秩序 163

第一章 地政的な真空地帯 168

第二章 ファシズムという不死鳥 180

第三章 グローバルな不平等の拡大 195

第五部 支配の幻想 215

訳者あとがき 245

本書をジミー・カーターに捧げる
人間の権利についての彼のメッセージは
なお、こだましつつづけている

はじめに

これは予言の本ではなく、緊急な警告の書であつて、今日の国際政治の状況と、二十一世紀の冒頭に起こると思われること、そして「起こつてはならないこと」が記されている。私の懸念は、世界の変化が人間の手におえなくなることだが、この懸念には、当然のことながら、われわれの生きる時代の政治的な意味やメッセージについての主観的な解釈を述べたところも含まれている。したがつて、本書には現状を分析したところもあれば、私の予測あるいは主張もある。

個人的な意見を表明した本は、ときに哲学の領域に踏みこむこともある。しかし、政治意識の目覚めがいちじるしいこの時代にあつて、現代の国際政治と取り組むには、人間の向上していく能力を考察の対象とするだけでは不十分である。人間の精神を形成する主要な部分がどう変化しているかということも視野に入れておく必要がある。

われわれの時代の歴史は明らかに加速されており、その軌道は不安定になっている。まずこの事実を認識することが、私の主張の出発点となる。歴史は終わるのではなく、圧縮されつつあるのだ。過去の歴史を見ると、きわだつて浮かび上がってくる時代がいくつかあり、人はそれによって歴史が進行して

いく感覚をはっきりとつかむことができた。しかし、今日の歴史は、明らかにあちこちで断絶していて、連続性がない。そして、断絶した部分がたがいにつかりあい、先を見通そうとするわれわれの感覚を圧迫し、歴史認識を混乱させる。

言い換えれば、われわれがいま生きている世界は、われわれが理解しはじめたときの世界とは違うものになっている。そして、われわれの理解が新たな現実を追いつくころには、世界は想像もつかないほどさま変わりしたところになっているのだらう。不連続性は、現代史の中で否定しようのない現実であり、われわれの生きる時代の意味を探るときには、この不連続性について集中的に論ずる必要がある。

さらに言うなら、とくに世界の先進地域で既成の価値観のほとんどが崩壊しているために、われわれは——過去ではなく——現在の細かく枝分かれした部分を、正しく理解しにくくなっている。全体主義的な政策はすっかり否定された。そのこと自体は歓迎すべきことである。しかし、その一方で、道德基準を定めるうえで宗教のはたす役割も小さくなり、消費を礼賛する風潮が倫理的な基準の代わりになるといわんばかりにのさばっている。人類は、自分自身と周囲の環境を管理する能力を飛躍的に増大させてきた。だが、われわれの物質的欲望はそれ以上に肥大しつつある。それと同時に、道德的な是非を判断したり、自己を律するための社会的な規範はますますあいまいになっている。倫理観が混乱している、歴史の理解が深まるはずがない。

本書は一つの前提を中心に置いている。それは、政治行動を後押しして世界を形成するのは、最終的には思想だということである。この思想には、単純なものもあれば複雑なものもある。良いものもあれば悪いものもあり、深く理解されるものもあれば、本能的に感じるだけのものもあるだらう。カリスマ

性をもつ人間の口から語られることもあれば、おのずと浸透していくだけのものもあるだろう。われわれが生きているのは、世界全体が政治に目覚める時代である。だから、知的な結びつきや混乱をひき起こす原因になるにせよ、また政治的な合意や衝突の原因になるにせよ、これからは政治思想がますます決定的に重要となるにちがいない。

より具体的には、私は次の三つの疑問に焦点を合わせている。

一、二十世紀の世界情勢を左右していたイデオロギーは全体主義であり、なかんずく共産主義だった。二十世紀に人類がおかした大いなる失敗は、歴史的にどんな意味をもつのだろうか？

二、二十一世紀を迎える世界は、外交的、地政的にどんな様相を呈しているのだろうか？

三、二の疑問はアメリカが世界の中ではたす役割、そしてアメリカ社会そのものにとってどういう意味をもっているのか？

いずれも大きな疑問である。また、容易に答えられない重要な疑問でもある。私はこれらの疑問に、重厚長大の学術的な本を書くという姿勢ではなく、直接的かつ個人的な意見を表明するいうかたちで取り組もうと思う。読者には、私の主張を明確に理解してもらって、それが説得力のあるものか、あるいは眉唾ものかを判断していただきたい。一つだけはつきりさせておきたいのは、本書が複雑な問題に安直な解決策を並べるたぐいの「ポリシー・ブック」ではないということだ。私が取り上げるこれらの問題は、これまでの長い歴史に深く根ざしているがゆえに解明することは難しい。これらの問題を解明

するには、まず基本となる政治的、社会的価値観を根本から見直す必要があるだろう。

このような主張は、部分的には私のこれまでの著作に端を発している。『二つの時代の狭間で』（一九七〇年）の中で、私は次のように述べた。ソ連が工業的發展の初期の段階で泥沼にはまっている一方で、アメリカは世界のどの国にも先んじて新しい時代に突入しようとしている。この事實は、アメリカのかかえる困難と有望な未来の両方を裏づけるものだ、と。本書でもこうしたテーマのいくつかを再び取り上げている。また『ゲーム・プラン』（一九八六年）では、ソ連の国内体制がかかえる弱点を考えると、アメリカは平和を乱すことなく冷戦に勝利するだろうと予測した。『大いなる失敗——二十世紀における共產主義の誕生と終焉』（一九八九年）は、書名が示すとおり、共產主義はもてる力を使いはたし、世界はポスト共產主義の新しい段階を迎えるという仮説を立てた。

本書での主張は、次の四段階で展開していく。

一、台頭する全体主義に支配された二十世紀の政治は、組織化された狂気の政治と呼ぶことができる。その狂気のせいで、二十世紀には過去に例のないほど血の雨が降った。しかし同時に、人類が自らの内的および外的状況を総合的に制御しようと、きわめて野心的な試みをしたことも事実である。法外と言ってもよいほど厚顔無恥な教義を構築して、その上に強制的なユートピア——すなわち地上の楽園——をつくろうとした試みは、結局、失敗に終わった。そして、その試みは、二〇〇年前のフランス革命でヨーロッパに解き放たれた合理的かつ理想主義的な衝動を誤った方向に導いてしまった。

二、全体主義の実験が失敗するのと時を同じくして、人類の政治意識はまさにグローバルなスケールで目覚めはじめた。ことによると、この偶然は次のことを物語っているのかもしれない。自由な民主主

義というフレームワークからすぐに連想されるのはフランス革命とアメリカ独立戦争だが、それはもともと世界全体に応用できるものであり、したがって政治に関して世界全体のコンセンサスを得るための基盤にもなりうる。しかし、世界的に見ると、統合に向かう力よりも分裂に向かう力のほうがいまなお強い。世界に通用するはずだった西欧の政治的メッセージは通用しなくなるかもしれない。それは、先進世界がリベラルな民主主義の内実に、寛容なコ・ニュ・コピアと言うべきライフスタイルを吹きこむ傾向が高まっているからである。人間は個人の欲求の満足を優先させ、また遺伝子など科学的な自己変革の手段を通じて、自らをつくり変える能力を拡大させた——そしてどちらも、倫理上の制限を受けなかった。その結果、モノを消費したい、私欲にふけりたいという欲望ばかりが肥大し、自制心がほとんど働かない状況が生まれるのも当然だろう。その反面、豊かな西側社会の外に目を向けると、いまなお人間の生活を支配しているのは、いかにして生き延びるかという基本的な関心であって、これ見よがしの消費ではない。このように正反対の傾向が存在しているのは、グローバルなコンセンサスが阻害され、深まっていく世界の亀裂は、いつそう大きな危険をはらむことだろう。

三、今日、本当の意味で世界の超大国と言えるのは、アメリカだけである。しかし、その背後では、伝統的な国際政治（インターナショナル・ポリティックス）が世界政治（グローバル・ポリティックス）に変貌をとげようとしている。言い換えれば、政治は——現代の通信技術と経済の相互浸透によって——さらに拡大していくプロセスとなり、国内と国外の区別が消えつつある。そうなると必然的に、真正正銘のグローバル・コミュニケーションが出現する可能性がでてくる。そこで浮かび上がってくるのは、世界に通用する価値観をもたない超大国がいつまでも優位を保っていられるのかという疑問である。た

しかに、アメリカの力はまさに現実のものであり、近い将来、ライバルの挑戦を受けることはないだろう。日本もヨーロッパも——第三部で述べるような理由から——アメリカに取って代わる存在にはならないと思われる。その意味で、世界の中のアメリカの立場は、過去の歴史を振り返っても例を見ないものである。とはいえ、寛容なコニユコピアがかかえる弱点の多くは、アメリカのいまの文化の本質的な流れを象徴している。欲求を自制することを目的として、何らかの倫理基準をもう一度柱に据えるべく意識的な努力をしないかぎり、ほかに代わる存在がないとしても、アメリカの優位はいつまでもつづかないだろう。

四、この世界にますます相互依存的になる単一の政治プロセスが出現しつつあるのに、アメリカは——経済よりもむしろ文化的な原因から生じた国内の弱点のせい——その政治プロセスの中で有効な権威をふるいにくくなっている。そのため、世界の不安定さが激化する状況が生まれる恐れがある。具體的に言えば、ソ連崩壊の後を追うようにして発生したユーラシアの地域紛争が緊迫の度を増すことになるだろう。大量破壊兵器の増加は、そんな予測を不吉なかたちで裏づけている。ポスト共産主義の世界が迎えた危機が深刻化するうちに、世界に通用しうる民主主義の魅力は薄れ、至福千年をとるえるデマゴグが再び出現することだろう。南と北の摩擦も激化するだろう。豊かな国々に対抗して、貧しい国々が——おそらくは中国に先導されて——結束を固めるかもしれない。

歴史は加速し、われわれは世界を改変する能力を高めつつある。そして、物質的な欲望は急速にふくれあがり、モラルはあいまいになっている。これらの要素が相互に作用して、かつてなく強い野放しの変化が生まれつつある。われわれは未来に向かって疾走しているが、その未来をかたちづくるうえでは、

われわれの意志よりも、変化のペースのほうが重要になろうとしている。この世界は、まるで自動操縦装置を搭載した飛行機のような。はつきりした目的地がないまま、スピードだけは絶えず加速しているのである。

とはいえ、希望のきざしがないわけではない。冷戦が終結したいま、われわれはグローバル・コミュニケーションづくりにより真剣に取り組む絶好の機会を迎えている。にもかかわらず、自らを意味のある存在として規定できる人間の能力が、主観的な期待と客観的な社会・経済状況におびやかされていることも厳然たる事実である。この二つの大きな流れは衝突するおそれがある。そうすると、世界政治——国際情勢に關しても国内の社会状況に關しても——は、制御しきれなくなつて迷走しはじめ、政治的無秩序と精神的混乱が起るにちがいない。

だからこそ、政治が存在する目的——すなわち人類の相互依存の条件——について、世界全体で共通した認識をもつ必要があるのだ。その認識に向けて大きく前進するには、外向きと内向きとを問わず、さまざまな野望に適當な限界——つきつめて言えば「過不足のないモラル」——をもうける努力が欠かせない。そのためには、社会のニーズと個人の満足、世界の貧困と各国の富のバランスを取るよう意識的に努力しなければならない。人間は、環境はおろか自分自身にたいしても無責任に手を加えようとしているが、それとは反対に、自然が人類にもたらしてくれるものや人間の真のアイデンティティを守る必要もあるだろう。

これこそ、ポスト・ユートピアの時代にアメリカが直面している重大な課題である。アメリカがこの課題に効果的に対応するには、あることを認識するところから始めなければならない。それは、本当の

意味で自らの命運を左右することのできる世界をつくるには、まずアメリカが、自制することについて合意しうる共通の規範によつて動く社会になるのが先決だということである。このことを理解してはじめて、われわれは二十一世紀に入ったとき、歴史の犠牲者ではなく、その支配者になることができるのだ。

ズビグニュー・ブレジンスキー

メイン州ノースイースト・ハーバーにて
一九九二年八月

第一部 組織化された狂気の政治

二十世紀が希望とともに幕を開けたとき、舞台の上は比較のおだやかだった。世界の主要国は、おまかに言つて、かなり長くつづいた平和を享受していた。一八一五年のウィーン會議でつくられた体制下にあつて、世界は基本的に平穩で、以後その靜寂を破つた國際紛争は三つしかなかった。一八五三年から五六年にかけてのクリミア戰爭では、フランスとイギリスがつかのまロシアと争つたものの、世界全体への大きな影響はなかった。ただし一八七〇年から七一年にかけての普仏戰爭と一九〇四年から五年の日露戰爭は、それぞれドイツと日本が世界の檣舞台におどりでる前兆でもあつた。

一九〇〇年一月一日を迎えた世界の主要国は、おおむね樂觀的な雰囲気にもちていた。權力構造は安定しているように思へたし、既存の帝國はしだいに開化され、足場を固めつつあるように見えた。オーストリア・ハンガリー帝國のような国は、民族が穩健に共存した好例と言へたかもしれない。ロンドン、パリ、ベルリン、ウィーン、ペテルブルクといった世界の主要都市は、産業革命の恩恵をこうむり、文化の中心地としても繁榮しはじめていた。芸術、建築、文学が開花し、革新的な氣運が希望にみちた創造の雰囲気をもしだしていた。独裁主義が支配してきた従來の構造に、民主主義、そして社会民主主義までがそれとなく進出しつつあつたが、既存の構造を目に見えるかたちで破壊するにはいたらなかった。社会の不平等はいたるところに見られたが、それはまだ当り前のことと思われていた。ただし——少なくともドイツのような国では——政府の介入が少しずつ増え、不平等の是正がなされるようになった。

しかし、何よりも重要だったのは政治情勢であり、少なくとも表向きは比較的落ち着いているように見えた。ナショナリズムは台頭しつつあつたが、まだ支配的な力になつていたわけではない。エリート